

**学部開講の朝鮮語学習の現状**  
**-主に教材の文法項目をめぐって-**  
**The Current Status of Korean Language Study in Kwansai Gakuin University/  
Undergraduate School Courses:**  
**A Focus on The Interaction and Content of The Textbook Grammars**

李秀炅

目 次

1. はじめに
2. 授業運営方針及び I～IV の到達目標
3. 文法教材と会話教材の導入部分と記述
  - 3.1 文字導入順
  - 3.2 音韻変化の扱い
  - 3.3 文法用語及び活用形の記述
  - 3.4 文法導入順
  - 3.5 学習段階別におけるいくつかの問題
4. 語彙について
5. むすび

キーワード：韓国語教育、教材、文法導入、文法用語、語彙習得

## 1. はじめに

これは 2016 年度および 2017 年度、本大学における学部開講の朝鮮語<sup>1</sup>に限定した内容であることを先にことわっておく。

学部の外国語に関する方針はそれぞれ異なるが、ここで扱う内容は所謂必修選択科目で、学生自ら選べるようになっているものに限る。したがって、モチベーションの高い学生も多数いる反面、いろいろな形の入試が存在するためかそれほどモチベーションも高くなく、学習能力も著しく劣る学生が同じクラスで学習しているのが現状である。本学のみならず、日本の多くの大学が少子化などの影響で似たような状況であるだろう。

このような現状のもとにおいては、学習者それぞれの能力を引き出す工夫をし、外国語のスキルを少しでも身につけられるようにしていくことや、ことばが背負っている異文化を分かりやすく伝えていけることが教師の重要な役割になってくる。とりわけ、学習者にとって初めて接することばの印象は教材を通じて強く残ると言っても過言ではない。朝鮮語の場合、幸い体系的でいろいろな意味で偏らない教材<sup>2</sup>が 2 種類使われている。しかし、いざ二つの教材を同時に進めていくと何かつりあわない、やりにくいと感じられた。このことは教材の相性問題と片付けることもできるが、もっと具体的に何が問題であるか、文法項目・進度・語彙をざっくり分析してみることにした。

## 2. 授業運営方針及び I～IV の到達目標<sup>3</sup>

運営方針としては、同一科目について(1)週 2 回の授業をそれぞれ文法と会話の特徴を生かして異なる二つの教材<sup>4</sup>で進める。(2)文法と会話は二人で担当し、授業内容などの運営は独立して行う。(3)成績評価は定期試験は行わず、それぞれ授業中に学期ごとに 1 回以上テストを行う(平常点なども設けている)。担当者がそれぞれ成績評価をし、その合算点を学部提出する。同一科目を二人で担当するチームティーチングの形式をとりながら、各授業の内容や運営についてはそれぞれが独立して行うことになっている。チームティーチングとは言え、授業の中身は文法と会話を軸にして教材が異なるので、互いの授業の内容については担当者が進度の目安で推測することがほとんどである。となると、学期最後の成績合

<sup>1</sup> 本学の名称としては朝鮮語だが、教材の内容は韓国語の正書法に基づいているのでここでは韓国語に統一した

<sup>2</sup> 例えば、『韓国語初級教材の語彙調査-教科書 15 種に現れた語彙的学習項目-』(2006)長谷川、李によると『ことばの架け橋』の語彙が 15 種の教科書の中で一番共通に現れた語数が多かった。文法項目においても同様である。

<sup>3</sup> 「2017 年度朝鮮語運営方針」を要約したものである。

<sup>4</sup> 『ことばの架け橋 改訂版』(2011)白帝社、は文法教材、生越直樹『キャンパス韓国語』(2007)白帝社、曹美庚他は会話教材。ただし、2017 年度は会話教材のワークブックは I・II クラスでは使用しないことにした(再履修を除く)。

の成績合算の時が一番協力が必要になるとも言える。  
 2017年度の教材における進捗（到達目標）は以下のとおりである<sup>5</sup>。  
 <表1>

| 文法         |              | 会話         |              |
|------------|--------------|------------|--------------|
| I: 1-6 課   | III: 11-14 課 | I: 1-7 課   | III: 12-14 課 |
| II: 7-10 課 | IV: 15-18 課  | II: 8-11 課 | IV: 15-17 課  |

3. 文法教材と会話教材の導入部分と記述  
 3.1 文字導入順(以下、文法教材は「K」会話教材は「C」とする。)

<表2> 「K」と「C」の順番

| 「K」                | 「C」                  |
|--------------------|----------------------|
| 1. 単母音 아어오우으이에애    | 1. 単母音 아어오우으이에애      |
| 2. 重母音(1) 야여요유예애   | 2. 重母音(1) 야여요유예애     |
| 3. 子音(1)平音 ㄴㄷㄹㅁㅎ   | 3. 子音(1)平音 ㄱㄴㄷㄹㅁㅎㅂㅅㅇ |
| 4. 子音(2)平音 ㄱㄷㅁㅅ    | 4. 子音(2)激音 ㅋㅌㅍㅊ      |
| 5. 子音(3)激音 ㅋㅌㅍㅊ    | 5. 子音(3)濃音 ㄱㅌㅍㅊㅃㅅㅆ   |
| 6. 子音(4)濃音 ㄱㅌㅍㅊㅃㅅㅆ | 6. 重母音(2) 와워왜웨외위의    |
| 7. 重母音(2) 와워왜웨외위의  | 7. 終声 ㄱㄴㄷㄹㅁㅎㅇ        |
| 8. 終声(1)ㄴㄷㄹㅁㅎ      | (ㄴㄹㅇ→ん/ㄱㄷㅁ→っ)        |
| 9. 終声(2)ㄱㄷㅁ        |                      |

単母音の導入順は同じである。韓国国内の学校文法記述（＝辞書の順番）ではなく、口の開きや舌の位置に近い発音を順番にし、韓国語を母語としない学習者の理解に配慮したものである。ただ、重母音(1)の発音記号の表記が「K」は[j]、「C」は[y]と表記しているので正確な発音練習をするためには表記の違いを説明する必要がある。これは文字導入の学習段階でハングルにかなをふって覚える習慣をなくすためでもある。

子音の導入順は「K」は無音、鼻音、流音、激音を持たない平音、濃音を持たない平音→有声音化する平音→平音に息を伴う激音→平音の発声器官を緊張させる濃音、といった順番になっている。「C」は辞書の順番に基づいて平音、激音<sup>6</sup>、濃音の順に進めていく。どちらにしても学習者は短い間に学ぶべき項目であるが、この場合は文法の方が先に子音の全体像を解説してから会話の方で細分化して発音練習を繰り返すのが望ましいだろう。しかし、先に全体像が現れているのは「C」の方であり、ペアの担当者間の調整があればさらに効果的であろう。

重母音は「K」の方が逆に辞書の順番で、「C」は初声の下にくる単母音の陽母音と陰母音を軸に右にくる母音を順番に示すことによって、はっきりした発音の違い<sup>7</sup>や、一つの文字の中に陽母音と陰母音が存在しないことをさりげなく工夫した形である。重母音がなかなか定着しにくい現状からすると、場合によっては<sup>8</sup>これについても教師がそれぞれの教材が異なる順番を示す意味を解説した方が良いと思われる。

終声はパッチムとも呼ばれるが、厳密に言うと終声とパッチムの定義は異なる。両教科書とも終声を「k」は口音と鼻音・流音<sup>9</sup>に分け、「C」は日本語の「ん」と鼻音、「っ」と口音に対応させて、終声という新しい概念と発音を分かりやすく解説している。しかし、パッチムが初声の形と同じでも終声では異なるので、とりわけ口音の中でも[-<sup>l</sup>]の7つはなかなか文字として定着しにくいところがある。こ

<sup>5</sup> ワークブックは会話クラスはⅢ・Ⅳクラスで使うことになっているが、実際担当者の判断に任されることが多い。  
<sup>6</sup> 「ㅁ/ㅎ」を除く。  
<sup>7</sup> 「ㅁ/ㅁ/외」についてはこの何十年の間、音による分別の機能がなくなりネイティブの間ではほぼ発音の区別はしないが本来は異なる発音である。  
<sup>8</sup> 現場の経験からすると学習者の意欲や能力による。  
<sup>9</sup> 口音 [-<sup>k</sup>] [-<sup>p</sup>] [-<sup>l</sup>]、鼻音 [n] [m] [ɳ]、流音 [l] であるが、表記も両者異なっている。

の段階においてパッチムの形を終声として正確に読める練習に多少時間をかける必要がある。終声という概念は音韻変化を理解する上で非常に大事で、のちのちの学習にまで影響を及ぼすからである。

その他、仮名のハングル表記については両言語の発音の相違などを学び、例えば自分の名前などをハングルに直して発音してみると、早い段階でハングルがより文字として実感される。日本の地名や人名などもハングルで表記できるように各教材には表記法を表にまとめ、練習問題もついている。この仮名のハングル表記法は1986年韓国の国立国語院が発表したものだが、最近その表記については議論があり<sup>10</sup>、研究者によって異論が出始めている。今後多少見直されることと思われるので柔軟に対応する必要がある。

以上、導入部分について検討してみた。Ⅰの30回の授業で文字導入に与えられる時間は文法と会話それぞれ概ね6-7回とみなすと、最終的には同じ内容になるとは言え、教師の立場からは上記の表のとおり進めていけばあまり余裕はない。細部の話を挟まなかったり、先のことを念頭において教科書にない話をしない限り、なんとか終わらせることはできる。しかし、学習者の立場からすると文字を覚えることに精一杯で、Ⅳまでモチベーションを保てるような環境には置かれてないと見受けられる。

### 3.2. 音韻変化の扱い

「K」と「C」は音韻変化の導入において提示の仕方が異なる。「K」は文字を学習する段階で有声音化、濃音化、連音化といった、文字が読める最低限の音韻変化のみを提示している。その後、学習段階別に分けて難易度や語彙の出現などを配慮しⅡで3つ、Ⅲで2つ、Ⅳで2つ学べるようになっていく。また、上記の音韻変化を最後に付録でまとめている。また各課に文法事項同様、解説と練習問題を設けている。

「C」は文字を学習時は連音化のみ提示し、一通り文字習得が終わったところで<表3>の音韻変化をすべて提示している。両者の共通点としては上記の音韻変化解説とは別に各課の本文に限ってその下に「K」は変化する発音のみを、「C」は例えば「濃音化」のような音韻変化の項目を示している。

以下は音韻変化について表にまとめた。( )の中はページと段階を表す。

<表3>

| 「K」                                  | 「C」                   |
|--------------------------------------|-----------------------|
| 1. 有声音化(11-Ⅰ)                        | 1. 有声音化(17-Ⅰ)         |
| 2. 濃音化(20-Ⅰ)                         | 2. 連音化(30-Ⅰ)          |
| 3. 連音化(21-Ⅰ)                         | 3. 濃音化(31-Ⅰ)          |
| 4. 鼻音化①(29-Ⅰ)                        | 4. 鼻音化①(31-Ⅰ)         |
| 5. 激音化(51-Ⅱ) <sup>11</sup>           | 5. 鼻音化②(32-Ⅰ)         |
| 6. 口蓋音化(62-Ⅱ)                        | 6. 激音化(32-Ⅰ)          |
| 7. ㅇの無音化/ㅇの弱化(69-Ⅱ)                  | 7. 口蓋音化(33-Ⅰ)         |
| 8. 2文字終声の激音化と無音化(85-Ⅲ) <sup>12</sup> | 8. ㅇ音の変化①/ㅇ音の脱落(33-Ⅰ) |
| 9. 鼻音化② <sup>13</sup> (107-Ⅲ)        | 9. ㅇ音の変化②/ㅇ音の弱化(33-Ⅰ) |
| 10. 側音化(127-Ⅳ)                       |                       |
| 11. 2文字終声の基本形/連音化の発音(157-Ⅳ)          |                       |

確かに、上記の2つの提示方法は多くの教材に見られる。つまり、一度に解説をとめておいてから音韻変化のある語彙が出現したとき参照できるようにしているか、解説を分散させてその課の学習項目に

<sup>10</sup> 例えば「長音は表記しない」とされているが、日本語は長音で意味が変わる言語なので最近の教材には「長音は表記しなくてもいい」など、少し婉曲な説明になっているが、上記の教科書には原則以外全くふれていない。また学習者も「けんいち」という名前は「겐이치」となるが、連音化が終わったら「게니치」と発音されることに気づく。韓国国立国語院の規定にはパッチムに「ㅇ」が使われてもいいとしているが、「んはㄴ」「っはㅍ」で表記することに教材の文面からは融通が効かない。

<sup>11</sup> 網掛けの部分はⅡ以降出現。

<sup>12</sup> 「C」は2文字終声の発音について1文字終声の解説と一緒に扱っている。

<sup>13</sup> 終声 [-k] [-p] [-t] と初声ㄹ、鼻音 [m] [n] と初声が連続する音の変化

含む方法である。幸いこの二つの教材の組合せは2つの方法で学ぶことができる。できれば発音は会話の時間に運用練習をするのが望ましいが、文法教材の解説がより詳しく、練習問題もあるので、最終的にはさほど問題はないように思われる。一方で、体系的な語学学習のためには毎回文法教材を持参させたり補充教材を用意したりせざるを得ない。しかも、「合成語による濃音化」、「終声の連音化」、「漢字語による濃音化」、「漢字語頭音のㄷ脱落」や「n挿入」現象など、I・IIの段階で多く出現する語彙<sup>14</sup>の音韻変化について説明できる資料がどちらの教材にもない。このことについて教師の十分な説明が伴うなら良いが、教材には「そのまま暗記」式で発音のみが書いてあるので、その理由が分からない場合は印象が薄く応用がきかなくなる。ここは学習者が音を通してコミュニケーション能力を向上させる、という語学の基本に戻って教材選択に検討の余地がある。

### 3. 3. 文法用語及び活用形の記述

韓国語は日本語と同じく用言は語幹と語尾から構成され、語尾が交替することで文法的意味を表す(以下「活用」)。教材の中にはいわゆる韓国の学校文法(以下「伝統式」)の立場で書かれたもの、語基式<sup>15</sup>、伝統式をベースに語基式の要素を取り入れたもの(以下折中式)などがある。このような視点からすると、「C」は典型的な伝統式教材だと言え、「K」は伝統式に若干語基式の要素も取り入れている折中式に近い。核心となる語幹と語尾の考え方は伝統式であるものの、活用形を三つのタイプに分類して提示している点が「C」とは異なる。

また、品詞の分類において活用するものを「C」では韓国の学校文法の立場で「動詞」と「形容詞」としているが、「K」では日本独特の品詞分類である「動詞」「形容詞」「存在詞」「指定詞」に分類している。用言の活用を導入する際、「文法」の授業でこれを明確にしておくべき点であるが、筆者の2年間の経験からしてこの内容について知らない学生が圧倒的に多い。例えば、2年目に入って連体形が一気に出現するが、その際1年目に品詞の概念が定着していないと時間的な無駄や混乱が生じる。IV以降でも中・上級文法を独習する際、4つの品詞の分け方が理解しやすいだろう。やはり文法は文法の教材に基づいて会話の解説との違いを教師が説明、フォローする必要がある項目である<sup>16</sup>。

次に、ㄷ語幹用言の扱いがあげられる。「C」はIで「ㄷ変則用言」として扱っている。「K」ではIVで「ㄷ語幹の用言」として扱っており、解説の内容はほぼ同じである。「ㄷ」語幹の特殊性を理解しないと活用ができない内容が次々出てくるので、早い段階で一度学習し、最後の学期にも一度今までの学習事項を振り返って定着させるという仕組みが偶然いい具合にマッチしたものと思われる。しかし、問題は「ㄷ変則用言」と「ㄷ語幹の用言」という表題である。一般的にㄷ語幹の脱落現象はㄷ語幹全てに適応されるもので、他の「変則用言」とは区別し、「ㄷ語幹用言」もしくは「ㄷ語幹の用言」と呼ばれている。この点について学習者に混乱が生じないように用語の統一が必要である。

### 3. 4. 文法導入順

文法導入の順については比べやすくするため、目次の順に表にまとめた。

<表 4>

| 入力順 | ことばの架け橋 文法 I~IV | 段階 | ページ | キャンパス韓国語 文法 I~IV   | 段階 | ページ |
|-----|-----------------|----|-----|--------------------|----|-----|
| 1   | 입니다/입니까?        | I  | 30  | 은                  | I  | 40  |
| 2   | 은               | I  | 31  | 입니다/입니까?           | I  | 40  |
| 3   | 이               | I  | 36  | 도                  | I  | 41  |
| 4   | 있습니다/없습니다       | I  | 36  | <b>이 아닙니다/아닙니까</b> | I  | 41  |
| 5   | 예(지점) *説明なし     | I  | 37  | 이 아니다              |    |     |

<sup>14</sup> 例) 合成語による濃音化:비빔밥/이변 주/다음 주, 終声の連音化:맛없다/몇 월/못 와요, 漢字による濃音化:열심히/일주일/경찰서/일정, 漢字語頭音のㄷ脱落:요리/육, n挿入現象:무슨 요일/서울역/안 잃어요

<sup>15</sup> 語基という概念は、前田恭作(1924)の日本国文法の活用形に対応する概念を河野六郎(1955)などが体系化したものであり、菅野裕臣は1981年に語基式の教材を出版することに至った。1988年に初めて語基式の辞書も出版された。現在はより進化した教材が多数出版されている。

<sup>16</sup> 日本における韓国語教育では用言の品詞を4つに区分するのが一般的である。

|    |                           |     |     |               |     |     |
|----|---------------------------|-----|-----|---------------|-----|-----|
| 6  | 도                         | I   | 38  | 습니다/습니까?      | I   | 50  |
| 7  | 습니다/습니까?                  | I   | 44  | 을             | I   | 51  |
| 8  | 을                         | I   | 45  | 지 않다          | I   | 51  |
| 9  | 에서(장소/기점)                 | I   | 46  | 이             | I   | 60  |
| 10 | 에(시점) * (本文に説明なし)         | II  | 50  | <b>있다/없다</b>  | I   | 60  |
| 11 | 지 않다                      | II  | 52  | 있습니까/없습니까?    |     |     |
| 12 | <b>이 아니다</b>              | II  | 53  | 있습니까/없습니까     |     |     |
| 13 | 이 아닙니다/아닙니까               |     |     | 과             | I   | 61  |
| 14 | 으시                        | II  | 62  | 르변칙 용언        | I   | 61  |
| 15 | 까지                        | II  | 65  | 에(장소)         | I   | 61  |
| 16 | 부터                        | II  | 65  | 의             | I   | 62  |
| 17 | 의                         | II  | 65  | 어요            | II  | 72  |
| 18 | 어(연용형)                    | II  | 70  | 안             | II  | 74  |
| 19 | 어 주세요                     | II  | 71  | 에(목적지/시간)     | II  | 74  |
| 20 | 어 보세요                     | II  | 73  | 에서(장소)        | II  | 74  |
| 21 | 어요                        | II  | 77  | 었             | II  | 82  |
| 22 | 이 아니에요                    | II  | 79  | 르변칙용언         | II  | 84  |
| 23 | 이에요/이에요?                  | II  | 79  | 어서(순서)        | II  | 85  |
| 24 | 안                         | II  | 80  | <b>은요?</b>    | II  | 85  |
| 25 | 과                         | II  | 81  | 이에요/이에요?      | II  | 94  |
| 26 | 하고                        | II  | 81  | 이 아니에요        | II  | 94  |
| 27 | 으세요                       | III | 86  | 으세요/으십시오      | II  | 95  |
| 28 | <b>으로(방향)</b>             | III | 88  | 하고            | II  | 95  |
| 29 | 으로(수단)                    | III | 88  | 겠(의지)         | II  | 106 |
| 30 | <b>이세요</b>                | III | 88  | 까지            | II  | 106 |
| 31 | 었                         | III | 97  | 부터            | II  | 106 |
| 32 | 으셨                        | III | 99  | 으니까(이유)       | II  | 106 |
| 33 | 지만                        | III | 100 | 르변칙용언         | II  | 107 |
| 34 | 으러                        | III | 101 | 어 주세요         | III | 116 |
| 35 | 에게                        | III | 102 | 어서(이유)        | III | 116 |
| 36 | <b>에게서</b>                | III | 102 | 으로(수단)        | III | 117 |
| 37 | 한테                        | III | 102 | <b>이요?</b>    | III | 117 |
| 38 | <b>한테서</b>                | III | 102 | 을까요(意向をたずねる)  | III | 126 |
| 39 | 께                         | III | 103 | <b>읍시다</b>    | III | 126 |
| 40 | 께서                        | III | 103 | 고 싶다          | III | 127 |
| 41 | 께서는                       | III | 103 | 지만            | III | 127 |
| 42 | 연체형 현재(동/존) <sup>17</sup> | III | 108 | 으러            | III | 128 |
| 43 | 연체형 과거(동/존)               | III | 109 | <b>이나(열거)</b> | III | 128 |
| 44 | 연체형 미래(동/존)               | III | 110 | 께             | III | 138 |
| 45 | 연체형 회상(동/존)               | III | 111 | 께서            | III | 138 |
| 46 | <b>고 계시다</b>              | III | 112 | 께서는           | III | 138 |
| 47 | 고 있다                      | III | 112 | 으시            | III | 138 |
| 48 | 연체형 현재(형/지)               | III | 117 | 겠(추량)         | III | 139 |
| 49 | 을 뿐/을 때                   | III | 118 | 네요            | III | 139 |
| 50 | 연체형 미래(형/지)               | III | 118 | 보다            | III | 139 |
| 51 | 연체형 과거 형(형/지)             | III | 119 | 으셨            | IV  | 148 |
| 52 | 겠(의지)                     | III | 120 | 지 마세요/마십시오    | IV  | 148 |
| 53 | 겠(추량)                     | III | 120 | 고(나열/순서)      | IV  | 149 |

<sup>17</sup> 동は動詞、존は存在詞、형は形容詞、지는指定詞である。品詞の表記は文法教材に基づいた。

|    |                  |     |     |               |    |     |
|----|------------------|-----|-----|---------------|----|-----|
| 54 | 는데요/은데요          | III | 121 | 어 보다/보세요      | IV | 149 |
| 55 | 고 싶다             | III | 123 | 어도 되다         | IV | 158 |
| 56 | 러간용언             | IV  | 128 | 을 거예요(예정)     | IV | 158 |
| 57 | 어서(원인/선행)        | IV  | 130 | 연체형 현재(형/존)   | IV | 159 |
| 58 | 못/지 못하다          | IV  | 131 | 을게요           | IV | 159 |
| 59 | 지요, 죠            | IV  | 131 | 에게 *(本文に)説明なし | IV | 166 |
| 60 | ㅸ변칙용언            | IV  | 137 | 한테 *(本文に)説明なし | IV | 166 |
| 61 | 어 드리다            | IV  | 139 | 못/지 못하다       | IV | 168 |
| 62 | 을게요              | IV  | 139 | 을 수 있다/없다     | IV | 168 |
| 63 | 어 보다             | IV  | 140 | 고 있다          | IV | 169 |
| 64 | 것 같다             | IV  | 141 | 어 있다          | IV | 169 |
| 65 | 밖에 *(練習問題に)説明なし  | IV  | 143 | 으면            | IV | 169 |
| 66 | ㄷ변칙용언            | IV  | 149 | 거나            | IV | 170 |
| 67 | 으니까(이유)          | IV  | 151 | ㄷ변칙용언         | IV | 170 |
| 68 | 을까요?(意向をたずねる)    | IV  | 152 |               |    |     |
| 69 | 만                | IV  | 153 |               |    |     |
| 70 | 보다               | IV  | 153 |               |    |     |
| 71 | 지 마세요/마십시오       | IV  | 153 |               |    |     |
| 72 | 엔(에는の縮約形) * 本文に  | IV  | 157 |               |    |     |
| 73 | ㅸ변칙용언            | IV  | 158 |               |    |     |
| 74 | 고(상태/나열)         | IV  | 160 |               |    |     |
| 75 | 는데(동/존) 은데(형/지)  | IV  | 162 |               |    |     |
| 76 | 네요               | IV  | 163 |               |    |     |
| 77 | 이 되다             | IV  | 163 |               |    |     |
| 78 | 이라도 *(練習問題に)説明なし | IV  | 155 |               |    |     |

<表の見方>

- ①助詞や語尾の表示は名詞の最後に終声があるものや子音語幹に接続する形に統一した。
- ②網掛けはそれぞれの教科書にのみ出現している項目である (IV以降は表示しなかった)。
- ③太字はそれぞれの教材が見出し項目として扱っているものである。用言の基本形を先に提示して活用形を解説している場合と、活用した形を見出し語にして基本形は解説部分に入れたものである。そのため、入力順の番号と項目の数は若干異なる。
- ④複数の意味を持っている項目は () の中に内容を表記した。
- ⑤\*は未習事項の助詞を説明なしで本文や練習問題に出している場合などの参考事項である。
- ⑥以上、文法項目としては助詞及び語尾の活用形や補助語幹などを扱い、語彙的な要素は除外にした。しかし、「-이 되다」はいろいろな意味で解説が必要な学習事項で、多くの教材が学習事項として扱っているため、除外にした。(除外した項目：数詞、助数詞、「-을 좋아하다」のような語彙的な内容)

<表 5> 以下は<表 4>で扱っていない学習事項の見出しである。音韻変化は<表 3>を参照。

|     | K   | C   |
|-----|---|---|
| I   | 1. 指示詞<br>2. 用言の基本形と語幹<br>3. 漢語系数詞<br>4. 漢語系数詞とともに使う助数詞   | 1. 指示表現<br>2. 所有表現<br>3. 位置表現                                       |
| II  | 1. 固有語系数詞<br>2. 固有語系数詞とともに使う助数詞<br>3. 特殊な尊敬形<br>4. 名詞の尊敬形 | 1. 曜日<br>2. -중이에요<br>3. 漢数字<br>4. 漢数詞の助数詞<br>5. 固有数字<br>6. 固有数詞の助数詞 |
| III | 1. -을 좋아하다  | 1. 敬語の特殊例   |

|    |                         |  |
|----|-------------------------|--|
|    | 2. 語尾の種類<br>3. 補助語幹のまとめ |  |
| IV | 1. 人称代名詞                |  |

以上の表にある文法項目数だけをまとめると以下のとおりである。() の中は表にない学習項目の数である。

<表 6> 以下は音韻変化を除いた学習項目の数である。<表 5>は()の中に記した。

|   | I     | II    | III   | IV    | 合計     |
|---|-------|-------|-------|-------|--------|
| K | 9(4)  | 16(4) | 29(3) | 23(1) | 77(12) |
| C | 13(3) | 17(6) | 17(1) | 17(0) | 64(10) |

学習項目の多くを占めている活用形や助詞の使い方などを教材の見出しを中心にして数えた場合、K は 89 項目になるが、音韻変化およびその他を考慮してざっくり 100 だとし、会話のみに現れている学習項目が約 10 項目ほどあるので、I～IVまでに学ぶ学習項目は延べ 110 項目ほどだと言える。はじめで言及したとおり、両教材の内容は段階的かつ体系的に学べるように工夫されているのでさほど大きな項目の違いはない。I は文字の導入段階であり、文法や会話の差より文字の書き方や発音の注意点に重点をおく時期でもある。しかし、二つの教材を平行して使用した場合いくつかの問題点もあり、各段階で注意を必要とする項目や解説の仕方、用語などの違いがあるので、以下それについて簡単にまとめておく。

### 3.5. 学習段階別のいくつかの問題

#### 3.5.1. I の内容について

I で主に扱う文字の導入順や発音については 3.1. で言及したとおりである。<表 3>で見られるように音韻変化については「C」で 9 項目ほどを先に学ぶが、練習問題もなく定着しないまま II にあがることになる。II は二つの教材とも数詞を扱っているので、数詞や助数詞、数詞を使った文を発音するためには、「ㄱ音の変化」、「激音化」、「濃音化」、「n 挿入」、「終声の連音化」、「固有語の濃音化」など様々な音韻変化の理解が要求される。しかし、「C」はもちろん「K」にも「合成語による音韻変化」<sup>18</sup>の記述はなく、「そのまま暗記」式で覚えることになる。これらの音韻変化は、難易度が上がるにつれて語彙の数も増えるので文章全体を正しく読めるようにするにも「そのまま暗記」式は非効率である。文法か会話、どちらかの教材は音韻変化を網羅したものにするか、もしくはその都度参照して練習問題などで定着するように音韻変化のみを扱っている教材を用意するとより理解度があがるだろう。

次に漢字語概念の記述が「K」にはあるが「C」は全くない。漢字語圏学習者への漢字語概念の導入の重要性は李(2012)<sup>19</sup>でも強調している。とりわけ日本語を母語とする学習者にとって韓国語の漢字語に関する知識の有無は語彙を増やす際、大きな差が出る要因になる。朝鮮半島の近代化の過程で日本語から多くの用語が入り、ほとんどが漢字語であることや、韓国語の漢字読みは音読みのみであることから似たようなものが多く、学習者にとっては覚えやすい。「K」の場合日本語と意味の同じ漢字語のみしるしをしているが、造語力の高い漢字語は異なる意味であってもなるべく教材に書いてある方が望ましい。2 年間の経験からしてベアの教師間で漢字語にはほとんどふれておらず、漢字語に対してある程度の方針の共有は必要ではないかと思われる。

#### 3.5.2. II の内容について

II は本格的に文の構造を理解し、基礎になる活用形や基礎語彙を学習する段階である。両教材とも「-어요」体や数詞はこの段階の学習項目になっている。「-어요」体に関して「K」は「連用形」という

<sup>18</sup> 「n 挿入」、「終声の連音化」、「固有語の濃音化」

<sup>19</sup> 李秀奭(2012) “일본의 한국어 초급 교재의 한자어의 도입 기술 현황 -교재 10 종을 중심으로 -”, 『Journal of Teaching Korean as an L2』 Volume 発音 8 (103-120)

概念、「-어」を先に導入してから連用形に接続する語尾として「요」を扱っている。一方、「C」では「-어요」体を丁寧終止形として「-어」の文法的な役割を説明しないまま提示している。また、「C」はⅡの最初の課で、文法解説がより詳しい「K」はⅡの最後の課で扱っている。「-어」の文法的な役割つまり、「連用形」を先に導入するのが順番としては望ましい。

品詞の分け方についても 3.2. で言及したように両教材の立場が異なり、文法教材の「K」でしっかり「C」との違いなどを指導しないと、Ⅲ以降の連体形などの学習に混乱を招く。用語の違いも同じであり、同じく 3.2. でふれた「ㄹ어간 용언」、「ㄹ변칙 용언」の問題もこの段階ではっきり「K」に基づいて教師が説明をしておく必要がある。また、「-어」もしくは「-어요」の活用では、頻度の高い変則用言について予習を兼ねてふれておくと、より変則用言の理解度も上がると思われる。〈表 4〉で分かるように「K」はⅣになってやっと変則用言が登場するが、「ㄹ」「ㄷ」「ㄹ」変則用言が各課に一つずつ出てくる一方、「C」はⅡの段階で「ㄷ」「으」変則、Ⅳで「ㄷ」変則が出ている。変則用言については 90 分授業を週 2 回×4 の過程であれば「으」「ㄷ」「ㄷ」「ㄷ」「ㄷ」「ㄷ」変則は最低限学習すべき内容となっている<sup>20</sup>。ハングル能力検定協会<sup>21</sup>でも 3 級の目安として「60 分授業を 160 回受講した程度」としているが、協会が発刊している「トウミ」<sup>22</sup>にも上記の変則はすべて明記されている。本学はⅠ～Ⅳで 60 分の授業を 180 回受講したことになるので、本来はすべて学ぶべき内容である。しかし、文法の進度を「K」18 課までにしたため、習うべき変則の活用を全部網羅して提示することがなかなかできない。なお、「C」の方は「ㄹ」変則は教材の最後まで現れない。

### 3.5.3. Ⅲの内容について

Ⅲでは連体形が登場する。「K」は 4 つの品詞に分けて、現在・過去・未来を段階を踏んで各課で提示し、時制を含めた練習問題がある。その間「C」は話しことばでよく用いられる表現の項目を学ぶ。この段階において文法の方でせつかく連体形の形を体系的に学んでいるので、会話の方で運用練習ができる内容になっていたらⅣになってからあらたに復習する時間がずいぶん減ると思われる。「C」はⅣになってから連体形が学習項目にあるが、「形容詞と存在詞の現在連体形」のみで動詞や時制で形が変わった内容など、結局Ⅲの文法既習内容を時間をかけて繰り返し復習することになる。「C」の教材にある練習問題どおりにこなせば問題はないだろうが、Ⅳにもなると「C」の各課にある「話す」の練習などでどうしても過去連体形などが使われる。ここに変則用言まで加わると会話の時間に文法の説明のため、必要な運用練習やイントネーションのチェックなど、会話本来の授業がすすまない。

### 3.5.4. Ⅳの内容について

Ⅳは変則用言がメインになるが、「K」は 3 つ「C」は 1 つだけである。また「K」は「C」Ⅰの既習事項である「ㄹ어간 용언」を扱う。「ㄹ어간 용언」はⅣに至るまで様々な活用形でふれてきたので遅すぎる感はあるがまとめるという意味で良いかもしれない。しかし、会話のⅠで学習した内容ではあるが、様々な活用形を学習してこそ納得できる内容でもあるので文法であれ会話であれⅡ、Ⅲに活用形が出る度に説明を要する。

次に「K」は語尾の種類を 3 つに分けている。「固定系」「母音子音系」「陰陽系」という、この解説はⅢで登場するが、この説明も先に提示しないと、活用形の項目右にあるこの用語が何を意味しているのか 102 ページに進むまで学習者には分からない。分からないで済むならまだましで、説明がなされていない場合教師が説明をしないのだから大した内容ではないのだと誤解を招く恐れがある。せつかく活用形を 3 つに分けて分かりやすく工夫している教材を選んだからには、そこにある用語についてきちんとした解説が行われないと意味がないのである。

この 3 つの活用形の一つ「母音子音系」の中で子音語幹に「-으」を伴う場合、「C」は最後の 17 課で

<sup>20</sup> 李秀旻、長谷川由起子(2002) “한국어 교과서의 문법 실러버스 비교-일본 학습자를 지도하는 과점에서-”, 『Journal of the International Association for Korean Language Education』, Volume13-2 (247-278)

<sup>21</sup> <http://www.hangul.or.jp/siken/level.php> 参照

<sup>22</sup> 文法項目、語彙などを各級別に分けている学習書



「ㄷ」変則用言の活用のみ説明があり、Ⅱに出てくる「ㄹ」変則用言はⅣの16課の連体形の形の説明があるのみである。「K」はⅣの最後の18課にあるので、例えば「듣은 이야기 (聞いた話)」が言えるまで2年かかるということになる。つまり、連用形の変則ばかりではなく「母音子音系」の「-으」の変則も網羅した、分かりやすい副教材などが必要とされる。

最後に両教材にある文法項目の提示方の例をあげておく。

<表 7>

|       | K の例        | C の例         |
|-------|-------------|--------------|
| 固定系   | 語幹+지만       | ~지만          |
| 母音子音系 | 語幹+르까요/을까요  | ~(으)르까요?     |
| 陰陽系   | 語幹+아/어/여+보다 | ~아/어/여(해) 보다 |

語幹の種類に関係なく同じ形が接続する固定系は問題ないとしても陰陽系にほぼ(해)がついていることは文法教材には見られない。もっとも混乱を招きやすいのは母音子音系の提示方である。このような違いは様々な教材によく見られるもので、提示方がまだ統一されていないのが原因である。教師から異なる形ではないことやその理由まできちんと伝えないと学習者にとっては難しく思われる恐れがある。

#### 4. 語彙<sup>23</sup>について

本稿では語彙に関しては教材を隅々まで確認することはせず、索引を入力して大体の数を調べてみた。したがって語彙に関する難易度や2つの教材にどのような違いがあるかなど、語彙自体に関する議論については次の機会にすることにした。ここでは数について少しふれておく。<表 8>はそれぞれの教材に載っている語の数である<sup>24</sup>。

<表 8>

|    | I   | II  | III | IV  | 合計    |
|----|-----|-----|-----|-----|-------|
| K  | 269 | 272 | 216 | 226 | 983   |
| C  | 237 | 234 | 129 | 179 | 779   |
| 合計 | 506 | 506 | 345 | 405 | 1,762 |

この数字は単に索引にある語彙の数に過ぎないので合計はあまり意味がないが、一応目安にしておく。以下の<表 9>は、「K」の欄に「K」の語彙を基準にして「C」と共通の語彙を、「C」の欄は「C」の語彙を基準にして「K」と共通する語彙の数を示したものである。

<表 9>

|    | I   | II  | III | IV | 合計  |
|----|-----|-----|-----|----|-----|
| K  | 164 | 136 | 81  | 52 | 433 |
| C  | 174 | 147 | 68  | 44 | 433 |
| 合計 | 338 | 283 | 149 | 96 | 866 |

こうして共通語彙の数を引き出してみると、ⅠとⅡで習得すべき語彙の数が多いことが分かる。ⅢとⅣでは繰り返し出ている語彙が多いので数が減っていくと推測できる。日本語を母語とする学習者の基本語彙の数については国内外でさまざまな研究が行われ、最小の724語から最大で10,000語以上もある<sup>25</sup>。ハングル能力検定協会でも60分授業を80時間受講した程度で950語、160時間受講した程度では公称語数を明らかにしていない。先ほどの文法項目と合わせて考えると、886語という数字は実用語彙、それぞれの教材のみにある語彙を計算すると876語という数字になるので、これを合わせた<表 7

<sup>23</sup> 活用形に関わるもの、文法的な要素、助詞など文法項目で扱ったものは除外した。

<sup>24</sup> <表 7><表 8>には文法的な要素のある語尾や助詞などは除いた数である。

<sup>25</sup> ソ・サンギュ (2007)『韓国語教育論講座』(482)、野間秀樹編著、くろしお出版

>の合計 1,762 語は理解語彙として妥当な数であると思われる。つまり、共通に出ている語彙については見て意味が分かるだけではなく、聞き・話し・読み・書きができるようにまで指導できるのが理想である。

## 5. むすび

チームティーチングで文法と会話の授業に異なる教材を使用する場合、一見何も問題はないようである。しかし、このように、二つの教材を比べてみると現場の学習者の混乱や非効率な内容、空回りする授業内容などの原因が見えてくる。90分授業を週2回、2年続けてどのような学習内容を学ばせるか、つまり何をどこまで学習させるか、到達点を明確にすることが一番に行われるべき課題であることが分かる。

評価の基準だけを定め、内容はそれぞれの担当者に任せて教科書をこなすだけの授業なら担当者は気楽である。しかし、本学は他の大学に比べ学習意欲の高い学生も多数いて、彼らの中にはありがたくも朝鮮語を選んできてくれている学生も多い。またモチベーションの低い学生に対しても、朝鮮半島の波乱万丈の歴史や文化をことばを通して伝えることで、少しでも視野を広げる義務が教師にはあると思われる。このような状況の中で現状における2つの教科書のあり方が彼らに負担を与え、モチベーションの低下に拍車をかける事態になることだけは避けたく、本稿を書くことにした。韓国語のスキルを磨くためには、例えば統一試験などをし、口頭テストを義務付けるのも一つの案である。また、韓国語を糸口にして異文化の楽しさやその向こうにあるものを教えたいなら、例えば一つの教材で少ない内容でもじっくり日本語と比べながら語学の新しい学び方を教えることも考えられる。

## 参考文献

- 이수경・하세가와 유키코(2002) “한국어 교과서의 문법 실러버스 비교-일본 학습자를 지도하는 관점에서-”, 『Journal of the International Association for Korean Language Education』, Volume13-2 (247-278), The International Association for Korean Language Education: Korea
- 이수경(2012) “일본의 한국어 초급 교재의 한자어의 도입 기술 현황 -교재 10종을 중심으로-”, 『Journal of Teaching Korean as an L2』 Volume8 (103-120), Research Center For Teaching Korean as an L2, PAICHAJ UNIVERSITY: Korea
- 李秀炅・長谷川由起子(2006) 『韓国語初級教材の語彙調査-教科書 15種に現れた語彙的学習項目-』, 東京: 白帝者
- 内山政春(2004) 「朝鮮語の活用を記述する2つの方法 -「語基」と「語基式」学習書の検討を中心に-」, 東京: 法政大学言語・文化センター 『言語と文化』
- 徐尚揆(2007) 「基礎学習語彙論: 日本語話者のために」, 『韓国語教育論講座第1巻』, 野間秀樹編著、東京: くろしお出版
- 趙義成(2007) 「文字と発音の指導法」, 『韓国語教育論講座第1巻』, 野間秀樹編著、東京: くろしお出版
- 鄭熙昌(2007) 「ハングル正書法と標準語」, 『韓国語教育論講座第1巻』, 野間秀樹編著、東京: くろしお出版
- 中島仁(2007) 「外来語表記法をめぐって」, 『韓国語教育論講座第1巻』, 野間秀樹編著、東京: くろしお出版
- 野間秀樹(2012) 「文法の基礎概念」, 『韓国語教育論講座第2巻』, 野間秀樹編著、東京: くろしお出版
- 矢野謙一(2012) 「学習文法項目論」, 『韓国語教育論講座第2巻』, 野間秀樹編著、東京: くろしお出版

<サイト>

韓国国立国語院 <https://www.korean.go.kr/>

ハングル能力検定協会 <http://www.hangul.or.jp/siken/level.php>